闇と光の交差点

つまり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
闇と光の交差点

【Ｎコード】
Ｎ６８３２Ｚ

【作者名】
つまり

【あらすじ】
魔法の完成と火星への進出、その二つがもたらしたもの＝戦争
それにより、レヲは大きな闇を抱えてしまう。
彼を一度は助けた女神も彼を呪われた者として、国を追放してしまう。
はたして、レヲの心に光はともるのだろうか。
初投稿：へたっぴですが、読んでやってください。

登場人物

レヲ（１４）
この物語の主人公。戦争がきっかけで人を殺すことを快感と感じるようになった。マロは”レオ”と呼んでいるが、正しくは”レヲ”である。

マロ（１３）
レヲに自分の町を破壊された。が、レヲを助けると言い、共に旅をしている。昔、アマリスに住んでいた。

シャドウ（１８）
火星探査隊の隊長。

マリア（？）
女神と呼ばれている。この世の神。

クロー（１４）
昔、レヲの親友だった。

リオン（１４）
レヲの双子の兄。若き科学者。戦争が原因で心を閉ざしてしまう。

この作品には登場人物が寝ている場面がありません。時間もごちゃごちゃです。適当小説を描くだけ描いていきますぜ。

01　栗色の髪

これは多分そう遠くはない未来のお話。
2222年、2月の火星。ここは、戦場だった場所。
一人の少年が、そこで独り歩いていた。年はまだ十四歳ほどで、金色の髪、瞳は悲しみを含んだような濃くて深い黒だった。ただ、口元だけはおもしろそうにただただ、笑ってた。
一羽、カラスが飛んでくる。少年の瞳をそのまま映したような真っ黒なカラスだった。

「やぁ、レヲ。お前さんは、今日もやったのかい？」

カラスが少年に声をかけた。レヲと呼ばれた少年は口元の笑いを残し、目的地へとひたすら足を進めた。

「うん。今日は特に気持ちがよかったね。」

カラスへ向けたその瞳は、邪気そのものだった。

「大丈夫かい？きっと、女神は怒ってるよ。」

カラスがレオの肩に乗り、彼の金色の髪そばに大きな影を作った。レオはまったくかまった様子もない。

「僕は女神なんて怖くないのさ。もっと怖いものがこの世にあるからね。」

さらに足を進めた。足が少し痛かったけれど、そんなことどうでもよかった。どうしても行かなければならなかった。ここは戦場だ

った。その事実だけをそこに残してきたから。

「君はキセキの称号に近いと思ったんだけど。あんなことがなかったら・・・」

カラスが少し残念そうに言う。その瞬間、レヲの口もとの笑みが消えた。そして、空を見上げため息交じりに言った。

「仕方ないさ。僕だってあれは回避なんてできない。どうしても僕が受けるべき罰だったんだから。」

そう言うと、彼は狂ったように笑いだした。誰かを嘲笑うかのように高い声で。横にいたカラスはその声がうるさくなり、再度飛び立った。

レヲは疲れ、ふらふらになり、しまいには、道端に大の字になってしまった。

レヲは空を見上げた。雲ひとつないさみしい空。

「僕は、いったい何のために生きてるんだろう。」

それは、カラスへ問いかけたつもりだった。いや、自分とか女神にとか世界とか、とにかく自分を見てるであろう人たちに。カラスはすべてを分かっているかのように答える。

「生きる意味なんてないさ。お前は罪を犯したんだ。許される日は来ない。」

そう言って、カラスは空の彼方へ消えた。あれは、何だったんだろう。僕は、初めて人語を話す鳥を見た。でも、昔にもこんなことあったかな。

僕の名前を知っていた。僕の存在を知っていた。女神とか、キセキの称号とかを知っていた。怖くなんかない。ただ、前に進むことが苦しい。

何かが僕が進むべき道の背後から引っ張るから。行っちゃだめだって。

レヲは起きあがり、前へ進んだ。じきに町が見えて来た。小さな小さな町。

門には一人の青年が立っていた。黒色の髪にこの地域の普通の一般服を着たそれなりに立派な青年だ。僕は人差し指を彼に向けて差した。

「さあ、僕を思いっきり楽しませてくれるかい？」

青年は、一瞬「は？」って顔をした。特に理由はないけど、僕は彼を殺したいと思った。

指の先から光線が出る。まっすぐでまぶしい光。たちまち目の前の青年を貫く。

「ぐは」

なんだ、おもしろくない。僕は、再度男に光線を放った。何発も何発も。

「ぐはっ、ぐ・・・ぐぉ・・・・・・・・・・・・ぐ・・・・・・」

どんどん力が強くなる。

「まだまだぁ！」

「ぐ、ぐぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

そうして動かなくなった。レヲには退屈すぎた。彼のような光景はもう何度も目にしていた。男が死んでもなお、欲求に耐えられず、ただ光線を放つ。しかし、何もおもしろくなかった。人はこんなにも脆い。

「さぁて、始めるとするかな。」

レヲは、町に目を向けた。こんな小さな町でも、事件が起きれば人はやじ馬となりこちらへ目を向ける。しかし、誰も助ける者はいない。それは怖いから。怖くてたまらないから。

「あの子、どこのお宅の子かしら？かわいそうに・・・」
「なにがあったの？わたし、さっき来たばっかりだから・・・」
「俺は、あん、な子供、怖く、なんかない、からな・・・」

人の声が、頭に響いてくる。うるさい。消えてしまえばいいのに。みんな、みんな、死んじゃえばいいのに！
僕は一人の少女と目があった。少女は震えあがる。

「あ、ああ・・・」

可愛い少女だった。きっと、将来は美人になってるだろう。でも、レヲが光線を放つとともにその場に倒れる。彼女の未来は消えた。さっきまで隣にいたであろう母親は、娘を置いてどこかへ逃げたようだ。みんなそう。自分が一番。

次はだれにしよう。ぐるりと見回すとみんな目をそらす。別に目が合わなくたって関係ない。次は手のひらを空に向けた。すると、何本もの光線が上へ向かい、そのまま人々めがけ、降り注ぐ。

休む暇もなしに、指を鳴らす。鳴らすたびに光の粒が人々へ飛んでいき、そのまま、爆発を起こす。そこらに悲鳴が飛び交った。
人が悲鳴を上げて倒れて行く様はそれはそれはおもしろいものだった。気持ちよかった。
そりゃ、まだ生き残ってるやつは数人いる。ただしこの町では、戦おうとする者はだれ一人いないようだ。前の町では石をぶつけられたっけ。
生き残った彼らは、涙目でレヲを見る。口では何か、つぶやいている。

「神よ、お助け下さい。神よ、敵を撃ち倒しください」

うっとうしい。レヲはそう思った。神にすがっても何一つ変わりやしない。
レヲは最後の数人に近づいていく。一歩二歩だんだんと歩み寄る。彼らは震えて逃げることもしなかった。つまらない。でも、まだ終わっていない。レヲは呪文を唱えた。神がいると信じ、味方であると断言した者に絶望を与えるために。

「キリスライトナズマ」

もう、終りだ。すべて。ここは戦場だった場所になった。
と思ったら、まだだった。ひとり、こちらを見てくる女がいた。
僕と同じ年くらいの子。

「へぇ、まだいたんだ。」

彼女は、別に神にすがっているわけでもなく、ただまっすぐな目でこちらを見ていた。僕は、不思議と彼女に死を与えたいなどとは考えられなかった。どうしてかは分からない。

栗色の髪にこの地域特有の緑色の瞳。怒っているわけでもなく、泣いているわけでもない。むしろ、レヲを歓迎しているかのようにも思えた。ふいに彼女は、問いかけた。

「どうして、こんなことするの？」

当たり前のことを聞かれたから、思った通りに返した。

「そりゃ、欲を満たすためにさ。」

「君は、こんなことするために生まれたわけではないでしょう？あたしは知ってる。」

「僕の何を知っているって？君はばかだ。僕は君を殺せるんだ。」

半分、彼女に光線を放つための勇気を後押ししようとした。でも、なぜか気持ちがそうさせてくれない。彼女の僕に対する思いが伝わってくるようで。

「あたしの名は、マロ。この町の人間だけど、一時、アマリス国にいたんだ。」

アマリス国は、天にいちばん近い国だと言われている。

「あなたのことはそこで知った。ずっと会いたかったよ、レオ君。」

彼女は、にっこり笑った。自分の町をこんなにまでされて笑っていられる彼女に、返せる言葉がなかった。こんな僕に笑いかけてくれる人がいるんだ。僕は、この女を信じていいとわずかだけど思うことができた。でも、騙されちゃいけないんだ。昔のことをわすれたのか？

忘れるわけないよ。と、そっともう一人の僕がつぶやいた気がし

た。
そして、手を彼女に向ける。終りなんだ、なにもかも。僕はただ、思うがままに人を殺してきたし、これからもそうするだろう。
彼女の視線が僕の心を覗いているようで、つらかった。でも・・・

「もう、終りなんだ・・・」

そういって、僕は光を放った。そこらが、光でいっぱいになり、もう何も見えない。そして一番強い光がまっすぐ正確に彼女を貫いた。・・・はずだった。しかし、なぜか、僕の攻撃は何の効果もなかったようだ。
だから、再度同じ魔法を放つ。あちらが攻撃してくることはない。守ってる様子もなく、ただ彼女は立っているだけだった。なのに、僕の攻撃は効いてなかった。

「レオ君、君の力は人を傷つけてる。でも、それじゃだめ！」

マロは、優しく言った。レヲは初めて彼女の強さに気がついた。

「あたしは、君を救いたい。君の闇を、取り除いてあげたいの。だから、君の向かう場所へあたしも・・・・」

そこまで言うと、すこし顔を赤らめ、「・・・ついていきたいんだ。」と言った。少し可愛く思えた。

「いいよ。ついてくるのは勝手だ。でも、僕の邪魔しないでね。」

それだけ言ったら、レヲは町の門へと歩き出した。ちらっと後ろを見、マロが来ているのを確認する。
さっきの言葉が少しだけ嬉しかった。自分のことを認めてくれて

いる気がした。

02　影のような男

僕は、次の町へ向かった。次の町も、とても小さな町だと聞いている。上空でカラスが飛んでいた。僕を見て、にんまりした。あまりいい気はしなかった。

なにもない道が続く。空っぽの世界。僕の心のようだっていつも思うんだ。この世界が消えてしまえばいいのに。それだけを思い、僕は進む。

「ねぇ、レオ？」

マロが沈黙に耐えかねたのか、声をかけてくる。女は、ホントうるさい生き物だ。

「ねぇ、レオってばぁ」

「なんだよ。うるさいな。」

ふりむくと、彼女は不機嫌そうな顔をしていた。普通の女の子にしか見えない。

「うるさいとか・・・。あたし、知りたいことがあって・・・」

「なにを？」

どうせ、つまらないことだろう。めんどくさい。

「どうして、アマリスを追い出されたの？」

単刀直入だな。マロは純粋な目でこっちを見ていた。

「あそこは僕の居場所じゃなかったんだ。それだけ。」
そうだった。あそこは、僕には似合わない。
「女神があなたのような人材を追い出すようなこと、するかな？」
するさ。それだけ、僕はあの方に愛されていなかった。だから、ここにいる。それだけが事実じゃないのか？ああ、そうだよ。事実さ。でも、僕はここにいる価値すらないけれど。僕が、ここで生きる意味なんてあるんだろうか。
自問自答を繰り返す。いままでだって、そうだった。だけど、答えが変わる事なんてありえなかった。
「今さら考えたって仕方のないことじゃないか。」
「そうだね。」
なんだか、おもしろくない。
「女神は、僕のことを愛せなかったんだよ。多分」
そう、僕はつぶやく。これじゃぁ、僕が愛されたかったみたいじゃないか。そんなことはない。僕は、あの方が嫌いだった。あの方も僕のことを嫌いだったに違いはない。
「でもさ、レオ。やっぱり間違ってるよ、こんなこと。女神はきっと怒ってるわ。」
その瞬間、僕はピキッときた。カラスと同じことを言われたのに気がついたからかもしれない。それ以前にマロが、自分をとがめることに腹が立った。

「僕が何をしようと勝手じゃないか！！！」

だから、つい強い口調で言ってしまった。どうして、マロがこんなに一生懸命かは僕には全く分からない。どうして、僕になんか。関係ないのに。

それからは、長い沈黙が続いた。べつに、退屈はしなかった。いつものことじゃないか。

ふいに、マロが僕をつついた。

「この近くにさ、空がきれいに見える場所があるんだ。行ってみない？」

さっきの事なんてなかったかのように、話してる。今からだって、こいつを殺そうと思えば、殺せるんじゃないかな。そう思ったりもする。

僕は僕の前を歩く彼女に、人差し指を向けた。人差し指は、人を差すためにある。僕の手は人を殺すためにある。僕は、いつもどおり、そっと小さな声で呟くんだ。

「さぁ、僕を楽しませてよ。」

光線が、まっすぐ彼女のほうへ向かう。今度こそ、いけるような気がした。

「ほら、こっち・・・・・」

そう言いながら、彼女が振り向く。その後の顔はすこし、驚いてたかな。あいつは油断していた。だからこそ、殺すのに絶好の機会

だったんだ。マロの好意は、うれしかったけど相手を間違えた。僕に関わったのがいけなかったんだ。僕は、最低なやつだよ、まったく。

たくさんの光が、彼女をめがけて走る。昔から、この光景が大好きだった。自分の手から無数の矢が見えないところにまで飛んでいくから。

しばらくすると、光が薄くなってくる。彼女の影が見えた。・・・まだ、立っていた。

死んでなかった。今までより強めに光を放ったのに、生きてた。どうして？

「君に、あたしは殺せないよ？」

笑ってた。何がおかしいんだ？何が！

レヲは、顔をゆがめた。恐怖で心が張り裂けそうになった。呪われてるんだ。そう思うしかなかった。

「殺せる。まだ、本気を出してないだけ！」

いままでにない、残酷な殺し方をしてやる。跡形もなく消してやる。

こんな気持ちになったのは、あの日以来だった。自分でも恐ろしくて、でも、止められなくて・・・。再度、強力な光を放った。放射能よりもはるかに強い光を。

まぶしい光。我ながら、とても愉快な気持ちになった。恐怖は力だ。恐怖が、彼の強さのすべてだ。恐怖さえあれば、マロを殺すなんて簡単な事なんだ。そう思うことで僕は、足を震わすことをためらうことを拒むようなことはしなかった。

「っははは、はははは。」

声が聞こえる。マロがいる位置から、とても高い声が聞こえる。
「言ったでしょ？あなたに殺せないって！」
彼女は、ただ僕を見つめていた。
「お願いだから、もう自分を傷つけないで。こんなことしてると、いつかレオも、魔力に食らい尽くされてしまう。」
僕も彼女を見た。
「それでもいい。」
「よくないわ。そんなこと、あたしが許さない。」
許されなくても、僕は道を行く。それがたとえ、自分を傷つけることになったとしても。
レヲは、マロから視線をそらした。いままで自分に関心のあるものはいなかった。女神でさえも僕を大勢の中の一人としか、見てなかったに違いない。
「ねぇ、レヲ。あたしを信じて。たった一度でいい。あたしに笑いかけて。あなたを助けたいの。ねぇ。」
「ムリだよ。僕にはできない。」
マロが僕に関わったことが、すこし悔しかった。僕さえいなければ、彼女はいまごろあの町で幸せに暮らせていただろう。なのに、彼女は町を破壊した人間とここに立っている。
「無理なんかじゃない。あたしがあなたを変えて見せる。絶対。ほ

ら、行こ？もうちょっとで見えるはずなんだ。」

彼女に連れられた場所は、とてもきれいな場所だった。でも、今までに見た景色の中で一番だってものでもない。遠くのほうに青い地球が見える。なぜか涙目になっている自分がいた。もう、とっくに悲しみなんて捨てたはずなのに。

「どうしたの？」

マロは、そんな僕に気がついた。

「涙なんて、レオには似合わないじゃん。」

そう言って、ハンカチを差し出してくれる。昔、女神がよくこうしてハンカチをくれたっけ。昔は、よく泣いたな。

僕は、次の町に行くのが嫌になった。人を殺すのがつらくなった。どうしてかは分からない。マロに会って何かが変わったように思った。でも、行かないと。

そっと、立ち上がり、町があるほうへ向く。

「そろそろ、行こうか。」

立ち上がると、僕は前方から誰かが来ているのが見えた。黒い髪に黒い服。顔は大部分が隠れており、年齢も分からなかった。

火星探査隊のものだろうか。防具が備わっており、この星の者とは思えなかった。きっと、地球から派遣されたのだ。

「目障りだよね。」

そう言って、人差し指を彼に差す。

「やめて、レオ。」

マロがレヲの腕をつかみ、とめた。レヲにとっては予想通りの事に、いらだった。

「邪魔はしないって言ったはずじゃなかったっけ？」

「でも・・・」

そう言うマロの手を振り払い、レヲは再び男に人差し指を向けた。神経を一点に集中させ、光を放つ。まっすぐ、彼に光が進んでいく。しかし、男に当たる直前で、プツンと光が消えてしまった。

「なっ、何！？」

その男はバカにしたように笑った。

「ふん、期待してきたのに何だ、その魔法。あーあ、つまんねぇ。」

きっと、レヲを殺そうと準備をしてきたんだろう。すこし期待外れだったようだ。

「俺の名は、シャドウ。火星探査隊、隊長。女神の命令でな、お前を殺せと言われたんでね。」

そう言った瞬間、目の前に現れる。

ガンッ

強く殴られ、そのまま腹部を蹴られる。レヲは何もできなかった。レヲの技は遠距離技である。また、発動するのに時間がかかってし

まう。シャドウのように連続して攻撃されればたまったものじゃない。

「おらおら、おもしろくねーなぁ。弱い、弱すぎる！」

殴るけるを繰り返すシャドウに為すすべはなかった。やっと、手のひらを空に向けることだけは出来た。そして、光を放つ。あれ・・・

「く、そ・・・」

まったく光がでない。

それを見ながら、シャドウが笑いながら言う。

「俺はなぁ、もっと絶望を期待してたんだよ。だけど、お前とはお別れだ。代わりにお前に絶望的な魔法を見せてやるよ。」

そう言って呪文を唱え始めた。シャドウの呪文はとても長い長いものだ。

マロは少し離れた所から見ていた。許せない。レヲをあんなにするなんて。あたしが助ける前に殺させやしないんだから。呪文を唱えている途中のシャドウに声をかける。

「シャドウ君、だっけ？」

「あぁ？邪魔すんなボケ」

シャドウが睨みつけてくる。

「なんなら、あたしが相手してあげる。」

「や、やめろ！」

レオが止める。やっぱり心配してくれてる。それだけで、十分なんだから。

「ほぅ、相手してくれるってんなら、やってみろや。」

そう言って、マロのほうへ向く。レヲは、意識がなくなってしまった。

マロ０１　金色の兄弟（前書き）

マロの回想編です。

マロ01　金色の兄弟

これは、マロが9歳の頃のお話。
誰もが人生のうちで一度はいきたいと願う国、アマリス。世界の神と呼ばれているマリアがこの国を作り上げたのは2年前ほど。魔力が高くないと入国を許されない国に、あたしは、今立っている。
このアマリスには、世界の中で唯一魔法研究所がある。そこに天才兄弟がいるという噂だった。
訪ねるとそこには、金髪の男の子が二人いた。片方はショートカット。もう片方は髪を長くのばしていた。二人とも、研究者らしく白衣を着てた。

「マロさん、いらっしゃい。えっと僕は、レオと申します。で、こっちが兄の・・・」

「リオンと言います。よろしく。」

二人とも優しそうな人でよかった。あたしは心から安心した。あたしは、ここで動物に魔法を覚えさせるための研究をするつもりだ。そのお世話役は、レオ君が担当らしい。時々リオン君も顔見せにくると言っていた。
それからは、幸せな日々が続いた。毎日、新しい発見があって、ちょっとずつ前に進んでいく感じがたまらない。そして、なによりレオ君との日々が楽しかった。

「マロさん、息抜きのコーヒーです。どうぞ。」
「研究は進みましたか？」

優しい言葉をかけてくれる彼に、あたしは心ひかれそうになって

いた。リオンくんも優しく、お兄ちゃんが増えたみたいでうれしかったんだ。平和な日々が続けばいいって思ってた。

生きていた場所

僕は夢を見ていた。
いつか、僕が行ったことのある実験場。
僕が殺した人たちが、なぜかそこにいて、僕を囲んで笑っているんだ。
一人が僕を指さして言った。
「お前は何で生きているの？」
僕は、思った通りにそれに答えた。
「意味なんてない。ただ生きる。それだけ。」
普段からそう思っていたから、そう答えた。本当に何も考えずに言っただけのはずだった。
「嘘だね。」
「えっ？」
いきなり、否定されたからびっくりした。
「なんだって？」
「おまえは、自分の生きる意味を知っている。なのに、知らんぷりをしてるんだろ？」
そいつは、僕を見下したように言った。

言っていることが、分からなかった。どうして、そんなことが言えるんだ。
僕には、生きる意味がない。いっそのこと誰かが殺してくれてもいいとそう思ってる。
「お前に何がわかる？」
「わかるさ。俺は、死んでもお前の心で生きているんだから。」
「僕の心にいさせた覚えはない。」
僕は、気味が悪いと思った。殺した人間一人ひとりを覚えるなんて性にも合っていない。
「いや、お前は覚えておくと約束したはずさ。」
聞いたことのない声だったので、その男の顔をしっかり見ようと、顔を見上げたところで目が覚めてしまった。
僕は、ベッドに寝かされていた。
真っ白い壁に真っ白い天井。このベッドも白で統一されていた。
「ココは、どこだ？」
すると、マロが飛んできた。
「レオ君！目が覚めたんだね！」
そうか、俺は陰のような男に倒されたのか。
マロがいるってことは、勝ったのか。あいつに。

「ここはどこなんだ？あいつは、倒したのか？」

「ここは、探査隊の船だよ。ったく、手間かけさせやがって。」

シャドウの声が聞こえた。

「っんな！なんでお前が・・・」

僕は声を上げた。どうして、こいつがいるんだ？

「レオ、きいて。彼は助けてくれたのよ。」

「は？」

「あのあと、あなたをこの船に運んだの。今の状態じゃ、危険だってシャドウが・・・」

危険だって？まあ、殺人鬼には変わりない。手には手錠がかけられてあったし、足も固定されていた。

「お前の精神状態だ。どうして町を破壊しているんだ。誰かの命令か？」

「命令？笑わせるな。自分がしたいようにしてるだけだ。」

「嘘だね。」

「え？」

夢と同じだ。口調も、そして声も。どこで、僕はその言葉を聞いたんだっけ。夢を見る前に、こいつと会っていたことがあるはずだ。でも、どうしても思い出せない。

「おまえは、そんな奴じゃない。」

その言葉を言われた瞬間、目が熱くなった。これは、涙？

そんな奴じゃないって、本当は言われたかった。でも、誰も言ってくれなかった。空を飛んでいたカラスも、優しくしてくれたマロも。

敵だったはずのシャドウに言われるなんて思ってもみなかったけど。

「誰の命令だ？」

「僕自身。もう一人の僕ってところかな。」

「どういうことだよ。」

それ以外言いようがなかった。

「もう、火星の町は全部破壊した。任務は終わった。解放されるんだ。」

僕は、自分でそれを言うとなんだか、嬉しさがこみあげてきた。長かった。

１０ある町をすべて破壊した。最初は、いやだったんだ。でも、なれると楽しくなった。

「そうか。」

シャドウが低い声で言った。恐ろしい声だ。
不意に近くの窓を見た。
もう少しで、地球につくようだ。

しばらくして、地球についた。
地球は、僕の故郷だ。僕はアマリスで、生きていた。
アマリスの中心的場所、アマ。そこに女神はいた。

「おつかれ、シャドウ。そして、レヲ。マロも久しぶりね。」

そう言って笑顔でいらっしゃった。

「そういえば、リオンくんと会ってあげて。レヲが出て行ってから
ふさぎこんじゃって。」

女神がそういうので会いに行くことにした。
リオンという名前には聞きおぼえがあったけど、顔までは思い出
せない。
リオンがいるのは、実験室８０１
メガネをかけた長髪の男だった。

「やあ。」

彼はそう言って、僕らを見た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6832z/

闇と光の交差点

2011年12月31日16時46分発行